

軽薄と評される男がいる。

その人物は、とある古びたビルの三階にある洒落たバーに顔を出すようになってから二ヶ月と経たないうちに、常連と認識されるようになった。彼をそう認識し、かつ評するのはそのバーに立ち入る常連たちと、バーのマスターと唯一の従業員だ。つまりは酒の隣人らだった。彼は明らかに場慣れしていた。「古びたビルの三階にある薄暗い雰囲気のあるバー」に初めて立ち入った瞬間から、まるで以前から知っていたような立ち居振る舞いをしていった。

意図せずに向けられる常連たちの品定めする様な視線にも一切怯まず、まるで長年通っているバーに身を置いているようだった。

男は常連の男達にすぐに顔を覚えられた。理由は単純、その男が週に四度は訪店したからだ。

男は決まってオクトモアを頼んだ。そして同じように独りでいる人物に声をかけた。

男はあかるく博識だったが、酔いが回ると決まって痴情的な話をした。ときは肉欲的で、ときには純情的だった。

軽薄と評されるに至った理由は他にあった。

男は異性をはつきりと好んだ。なにも毎回女性を口説こうとしていたわけではない。男は相手の知識の偏りに合わせて楽しく会話をすることが半分だった。そうするときの男の目的は会話を楽しむことだったが、ほとんど毎回同じ夜を過ごした。逆に、口説こうとして口説けたことは一度もなかった。

主にそういった理由から、男は軽薄と評された。口がよく回り、酒を好み、人を選ぶ場所に場慣れした男にはこれ以上ない程に適した評価だった。

しかし、その評価に対し、マスターが疑問を覚える機会が、ある日訪れた。

普段は陽気極まりない三十代半ばの優男が、どうにも不安そうな顔で訪店したのだ。その日、店はなかなか繁盛していた。入り口近くに座っていた個人事業主の中年が訊ねると、なんと店先に瘦せた子猫が数匹いるのだと言う。しかし優男はアレルギーを持っているため、どうしようもできない。されどある両親の呵責から浮かない顔をしている、という事の顛末だった。口から生まれたと評される男が静かであるその事情は狭い店内にあつという間に広まった。

皆、一様に立ち上がり、ある者は心配から、ある者は好奇心から、ある者は特に理由もなく、店の外に出ていった。

マスターは店内があつという間に静かになっていく様を客観的に見ていた。

店内に残った軽薄な男を見て、彼は見張った。居残っていることに驚いたのではない。軽薄な男の表情を見て驚愕したのだ。経験豊富な男を驚かせたその表情はとてもとても無感情だった。死にかけの猫の話を確認に訊いていたはずなのに、まったく興味関心を持っていなかった。

オクトモアを飲み、しあわせそうにわらいこそしたが、猫への関心は皆無だった。

彼はマスターに見られていることに気付くと不思議そうに小首を傾げた。

マスターは静かに評価を改め始めた。